

ルソーにおける本性的善性論の論争的意義について

八島 朔彦（本学社会学研究科博士後期課程）

本報告は、ルソーにおける本性的善性論の生成過程に着目することにより、ルソーの本性的善性論が、依然として解決済みの問題でないことを示し、さらに、その新たな解釈の可能性を開くことを試みるものであった。

「人間は本性的に善良である」という本性的善性の命題をルソーが繰り返し主張し、それがルソー思想において重要な位置を占めていることは、ルソー研究において常識である。これまでの研究においては、この命題は、第一に、ルソーに内在する直観的で感性的な原理として解されてきた。そして、そのような解釈に基づいて、本性的善性の主張は、ときには、キリスト教の原罪批判の議論として引かれたり、またときには、ホッブズ主義批判の議論として引かれたりしてきたのである。

このような従来の解釈に対して、本報告は、「人間は本性的に善良である」というルソーの主張が、シャルル・ボルドとの論争の中で形成されたものであることに着目し、本性的善性の命題を、ルソーの内在的な思想原理として解することを退け、ルソーとその論敵との議論のなかに位置づけて解すべきことを主張した。また、その際、ルソーの本性的善性論の論敵として、キリスト教の原罪論やホッブズの議論を想定することは、必ずしも自明ではないことを指摘した。ルソーの本性的善性の主張が、正確には、何を意味し、何を意図していたのか、という問題に、従来の研究は十分に答えていないという点については、一定の理解が得られたものと考えている。

では、ルソーの本性的善性論は実際には、何を意味・意図していたのか、という点については、しかしながら、本報告は十分に明らかにすることはできなかった。この点について、本報告は、ルソーがその本性的善性の主張を形成したところの、シャルル・ボルドとの論争を詳しく検討し、ボルドの議論の背後にあるものを考察することで、辛うじて、ルソーの本性的善性論が、*doux commerce* の議論の批判として展開されている可能性を引き出した。しかしながら、*doux commerce* の議論との対立において、「人間は本性的に善良である」という議論が、どのような意味を持ち、どのような意義を持っているのかについては、従来の本性的善性論理解を超える議論を展開することはできなかった。しかも、ルソーの思想が、『学問芸術論』に端を発する *doux commerce* との対決によって形づくられたということ自体は、ルソー研究において常識的なことであり、議論がふりだしに戻ってしまった感もぬぐえない。質疑においても、ご指摘をうけたように、ルソーの本性的善性論の意味自体は、その形成過程においてよりも、むしろ、それが具体的に展開されている『人間不平等起源論』や『エミール』といった作品において改めて検討されなければならないだろう。

そのほか、質疑応答においては、啓蒙主義対啓蒙批判の様相を呈しているルソーとボルドとの論争と、アドルノ、ホルクハイマーの『啓蒙の弁証法』の議論との関連性や、ルソーとボルドの論争と当時のイギリスの言論界との関連性など、ルソーとボルドの論争を、時間的にも空間的にもより広い視野から問うご質問をいただいた。それらは、不勉強な報告者には、専ら今後の検討課題として残されることとなった。